

三商レポート

第九十話 「被災地視察ツアー報告」

相続プラザ（株）三商 内藤 雄

〒187-0003 小平市花小金井南町 1-14-24 電話 042-467-2103

URL <http://www.souzokusoudan.net> E-mail sansyo@trust.ocn.ne.jp

「物見遊山」と言われてもいいから、現地をこの目で見て感じておきたいと思っていた。縁あって、中小企業診断士の有志が企画された「宮城県三陸地域を巡る被災地視察と福興市参加ツアー」に参加させていただく機会をえた。被災地特例法により、3ヶ月の相続放棄と限定承認の期限が11月30日まで延長されていたが、その利用状況も知りたかった。

深夜のバスで東京駅前を出発した。翌朝、石巻で中型バスに乗り換え、南三陸町へ。まず立ち寄ったのは、杉木立に囲まれ朝の靈気につつまれた入谷八幡神社。参拝のあと、神社の山麓にある「復興ダコの会」の作業所を見学させていただいた。東京から現地に入り、ここで生活しながら長期ボランティアとして支援活動をしている若い女性が説明してくれた。この作業所は廃校となった中学校を補修して作ったもの。ここに震災で家族や家や仕事を失った人達が集まり、新しい仕事を作る場にしようとしている。南三陸町は「蛸(タコ)」の産地として有名である。復興を願い、可愛い縁起物のタコの置物「オクトパス君」(置くと試験にパスする)などを作っている。「自分たちで新しい仕事を作り出すことで人が集まります。他愛ない会話をするなかでコミュニケーションと笑顔が生まれ、頑張れるのです。」しっかりとした話し方が頼もしく笑顔が素晴らしい。地元のお年寄りから「嫁こさ来ねか」と言われているという。

(オクトパス君の情報： 南三陸復興ダコの会 www.ms-octopus.jp/)

「壊滅的」と言われた南三陸町へ入った。テレビの映像や新聞の写真で断片的に見ていた町の様子が、次々とリアルに目に入ってくる。鉄骨がむき出しとなった3階建て建物が、その時を証言するかのように残っている。現地に立った。周りには何も無い。町中が見渡せてしまう。3月11日のあの津波が来るまで、ここで多くの命の営みがあった…。身内と多くの知り合いを亡くした「語り部」さんが、何度も声をつまらせながら詳細に状況を話してくださった。「辛いけど体験した者だから伝えられるので」と。「避難してください」と放送を続けながら波に飲まれた女性がいた防災対策庁舎の保

存をめぐって、「後世のため」と「つらい」とで住民の賛否が分かれているという。)

新北上川河口から5キロも上流にある石巻市立大川小学校へ。
ゆったりと流れる川のほとりに、ポツンと廃墟となった立派なコンクリート造りの学校があった。正面に慰霊塔があり、祭壇に多くの花が供えられていた。「観光客」をふり返ることもせず、一心に祭壇を清掃し、花の手入れをしているご夫婦がいた。ここでお子さんを亡くされたご両親だと思う。カメラのシャッターを押す気分にはなれない。それにしても、こんなところにまで津波が来るとは…。
(大川小学校では、全児童108名のうち68名が死亡し、6名が行方不明になっている。また、教職員の13名中9名が亡くなっている。スクールバスの運転手1名も死亡。)

重い気分でバスに乗り、南三陸町の「福興市」へ向かう。
移動の途中、いたるところに仮設住宅が目に入る。
「福興市」は、震災後の4月から、少しでも早い復興を願い行政や地元の事業者やボランティアが力を合わせて開始した。毎月最後の日曜日の恒例開催となり、今では日本中から参加する人たちがいる。元気な掛け声が飛びかい、多くの人がライブや買い物などを楽しんでいる。このにぎやかさに救われた気分になる。
(「たこの唐揚げ」「ホタテの串焼き」「越前そば」を食べ、「オクトパス君」を買う。)

最後の目的地の女川町へ。
港のシンボルであったマリンパルは倒壊してしまったが、その事務局長さんから生々しいお話を伺った。地方出張から帰ってきてすぐに震災に遭われ、咄嗟に山に駆け上がり生き残ったという。「津波は前から来ると思っていました、女川では左右から山にあがった波が後から返しの波となって、高台に避難していた人たちまでさらっていった。翌日の町の中は地獄絵でした。」「町に来てください。そして魚を買ってください。そうすれば、氷や箱を作る仕事ができます。お店の人や漁をする人が元気になります。」と。おだやかに光り輝く海と紅葉の山に囲まれた美しい景色を見ながら、「地獄絵」を想像することはつらい。
マリンパルの仮設市場で買い物をする。売り場の女性が「ありがとうございます。また来てくださいね。」と笑顔での対応。買い物が現地の役に立っていることを知る。

町はなくなっても、現地は一生懸命に生きていた。それぞれの立場で自分ができることをしている人たちがいた。相続放棄や限定承認のことを聞く気分にはなれなかった。帰りのバスの中で、ツアーを企画してくださったリーダーさんは「これから寒くなると現地に足が遠のきます。どうか現地のことを忘れないでください。」と思いを話された。高速道路でわずか6時間。東京に戻ると見上げるビル群とあふれる光の別世界。遠いところの出来事に思えてしまう自分が怖い。現地のことを忘れてはいけない。

2011年12月1日

～今年も「三商レポート」をお読みいただきありがとうございました。～